© 東京新聞

生活

旬のやさい　牛蒡（ごぼう）

根は便通、葉はじんましん、種はできものに効くとされ、薬として重宝されてきました。食するようになったのは、江戸時代に入ってから。

くらしのこよみ
うつくしいくらしかた研究所

Dr.松井英男の
在宅医療のカルテ

●認知症のケア

ある高齢者施設では、夕刻になると、玄関ホールにKさんの姿が見えます。手には、荷物を詰めた小さなかばん。「どこかへお出掛けですか」と声を掛けると「（家に）帰りたいんです」と、返事があります。「診察が終わってからにしましょう」と言って部屋に連れていくのですが、少したつと再び玄関に向かっていきます。

アルツハイマー病の患者が施設に入ると、生活環境ががらりと変わり、不安感が強くなります。夕方には「家で食事を作らないと」「こんな所に遅くまでいてはいけない」といった思いが募るのでしょう。「帰りたい」と言い出すのはある意味当然なことなのです。

Fさんは、いつもティッシュペーパーを服の胸元にしまっています。認知症の女性に多く見られるのですが、これにも何かの意味があるはずです。日本でティッシュペーパーが一般家庭に普及したのは一九六〇年代のこと。患者さんの若いころにはとても貴重だったでしょう。そのため、これを大事にしたいという思いがいまだに強く、そのような行動になっているのではないかと想像しています。

患者中心の医療を心がける

患者の視線で考える

患者さんの訴えに耳を傾け、それまでの生活に向き合うことで不安な気持ちを取り除き、安心できる場を作ることが認知症のケアでは大切です。

先頃発表された、国の認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）では「患者の意思を尊重し、住み慣れた良い環境で自分らしく暮らすことができる社会の実現」を基本的な考え方としています。医療・介護面では「最もふさわしい場所で適切なサービスが提供される循環型の仕組み」を作るとありますが、削減された予算の中でこれをいかに実現していくかが課題と言えるでしょう。

（川崎高津診療所院長）

＝次回は十七日掲載